



弦楽合奏団

エテルニータ

第13回コンサート

2016. 6. 26 [日]

14:00 開演 (13:30 開場)

宇都宮短期大学長坂キャンパス
須賀友正記念ホール

PROGRAM

J. S. バッハ = ニールセン
シャコンヌ

J. S. Bach = R. Nielsen : Chaconne

山田栄二
月明かり千地蔵～弦楽合奏のための

*** 休憩 ***

モーツァルト
交響曲第40番 ト短調 K.550
(山田栄二編)

W. A. Mozart : Symphonie Nr.40 g-moll K.550



J. S. バッハ = ニールセン：シャコンヌ

6曲から成る「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」(BWV1001～1006)の中の、パルティータ第2番ニ短調(BWV1004)の終曲が「シャコンヌ」です。「シャコンヌ」は短い低音主題に基づく変奏曲の一種で、最初に主題が演奏された後、30の変奏が次々と繰り広げられていきます。全体は257小節にも及ぶ長大な楽章で、その壮大さと豊かな音楽性ゆえに様々な編成でのアレンジが施されてきました。その例を挙げますと、ブゾーニのピアノ版、ブラームスの左手のためのピアノ版、デニソフのヴァイオリン協奏曲版、ストコフスキーや斉藤秀雄の管弦楽版など実に多彩で、原曲がいかに魅力的であるかを物語っています。本日演奏される弦楽オーケストラ版はR.ニールセンという人の編曲で、独奏群と合奏群の2つのグループによるいわゆるコンチェルト・グロッソの形で演奏するアレンジがなされています。このニールセンという人物はデンマークの有名な作曲家とは別人のようで、詳細は不明でした。

山田栄二：月明かり千地蔵 ～ 弦楽合奏のための

今から30年前の1986年、UPAの第4回定期演奏会の委嘱作品とし書き上げた作品で、マリンバ五重奏曲が原曲です。昨年の「花の五百羅漢」に続いて、エテルニータのご厚意で弦楽合奏のための改訂版として復活することが出来、感慨もひとしおです。

石仏三部作の中では(もう一曲は「雪の百地蔵」)変拍子や不協和音を多く用い、遊びの要素もたっぷりと含ませた意欲作で、私自身が一番気に入っています。

かつて、鎌倉の長谷寺に存在したおびただしい数のお地蔵さんを目にした時の感動や驚愕を音楽化したものですが、さらにそこから自由な妄想を展開して、あたかもサンサーンスの「死の舞踏」やムソルグスキーの「禿山の一夜」のパロディのような内容になりました。かなりアニメ風な音楽になっている事も否定できません。

モーツァルト：交響曲第40番ト短調 K.550

1788年に、39番、41番とともに、モーツァルトの三大交響曲と言われている名作中の名作。冒頭のヴィオラの刻む和音に乗って現れる“ため息の動機”を聞いた事がない人はまれでしょう。作曲された目的や、演奏された記録が全く残されていないので、モーツァルトが生きている間は演奏されなかったのではないかとされていますが、初稿に含まれていない2本のクラリネットが使用された改訂稿も存在するところから、現在ではその説は否定されつつあります。

そのクラリネットを含む全ての管楽器を省き、弦楽器のみで演奏できるように編曲したものが今回演奏されるこの版です。この形での演奏を今まで一度も聞いた事がないので、ひょっとしたら初めての試みかもしれませんが、どこからか“神をも恐れぬ不屈き者のなせる業”という声が聞こえてきそうで、正直言って本番が怖いです。

第1楽章 モルト・アレグロ 2分の2拍子

第2楽章 アンダンテ 8分の6拍子

第3楽章 メヌエット(アレグレット) 4分の3拍子

第4楽章 アレグロ・アッサイ 2分の2拍子

Eternita

弦楽合奏団

指揮 諸岡範澄
 ヴァイオリン 青柳敬子 赤羽根洋子 打保早紀
 川俣洋子 小松崎倫子 *高橋真二
 土屋恵子 福富恵子
 ヴィオラ 川沼文夫 ◯中村淑江 *諸岡涼子
 チェロ 荒川育子 ◯君島茂
 コントラバス 増山一成

ステージマネージャー 小林俊夫

◯団友 *エキストラ

弦楽合奏団 エテルニータ

「エテルニータ」とはイタリア語で「永遠」を意味します。
 この弦楽合奏団は2000年03月に行われた宇都宮短期大学百周年記念コンサートで再会し、宇都宮短期大学附属高校音楽科(あるいは宇都宮短期大学音楽科)で学んだ有志で結成されました。

そして未永く活動していこうという願いを込めて「エテルニータ」と名付けたのです。

音楽に限らず、何かを学んでいくことに終わりはありません。私たちは世界中の偉大な作曲家達が残してくれた、数えきれないほどの作品に触れ、それを勉強することで少しずつ前進していこうという意思を持った音楽家の集まりです。



指揮 諸岡 範澄



国立音楽大学器楽科卒業。1993年ブルージュ国際古楽コンクールアンサンブル部門第一位受賞(Trio van Beethoven)。バッハ・コレギウム・ジャパン、P.ヘレヴェッヘ、A.ビルスマ、クイケン兄弟ら、内外の演奏家と数多くの演奏会CDレコーディングに参加。宗教曲、世俗曲を問わず声楽曲の通奏低音奏者としても豊かな経験を持つ。またモダン・チェロ奏者としてもソロ、室内楽等の分野で活躍する他、作曲も手掛ける。1997年指揮者としてデビューし、これまでハイドン、モーツァルト、シューマン等4枚のCDをリリース。1999年「第13回古楽コンクール・山梨」審査員を務める。2000年韓国国立ソウル芸術大学におけるバロック音楽セミナー講師として、また漢陽大学学生による「コレギウム・ムジクム・漢陽」の指導者として招かれ度々訪韓している。2007~08には西東京市主催企画「ベートーヴェンの学校」(校長・西原 稔)で音楽監督を務める。バロック・古典派にとどまらず、ロマン派から近・現代に至る幅広い指揮レパートリーを持ち、またプロ・アマチュアを問わず奏者の自主性を引き出す指導力にも定評がある。「東京五美術大学管弦楽団」「オーケストラ・Mzima」「東京女子大学カレッジ・ストリングス」指揮者。「ひたちなか楽友会」講師。「オーケストラ・シンポジウム」音楽監督。

エテルニータ顧問・作曲・編曲 山田 栄二



1948年宇都宮市に生まれる。宇都宮短期大学作曲科卒業。
 作曲を石黒脩三氏に師事。同短大と同附属高校の講師を務めた後、1984年から作曲、編曲活動に専念。
 作品にオペラ「ゆきと鬼んべ」「殺生石物語」「歌法師蓮生」「那須野巻狩り」「小山物語」、オペレッタ「不思議の国のアリス」、室内楽曲「博物誌」「動物園の情景」「フェアブル昆虫記」、大正琴と語り手のための「手無し娘」など多数。
 1999年県文化奨励賞受賞。